

(日本語訳)

2011年6月5日

## バングラディッシュ、新大学で女性がリーダーになるチャンスを得る

文・シャイラジャ・ニーラカンタン  
バングラディッシュ、チッタゴン

タリバンに支配されるアフガニスタン・ガズニー地区出身の女性でアジア女子大学の学生パルワナ・ファヤーズは学生や教授および支援者で埋め尽くされた会場のステージ中心に設置されたマイクに確かな足取りで向かい、アフガン女性の希望について話しました。続く10分間、彼女の熱烈なスピーチが会場中に響き渡りました。

設立3年目の当大学の1年生であるファヤーズ氏はアフガン女性の日常にどれだけの恐怖が存在し、自分がここの学生になったことで時には道端に放置されたままの女性の無残な亡骸を目の当たりにせず済むことへの感謝の意を表しました。「アフガンの女性を恐怖から解放しなくてはなりません」と拍手喝采に迎えられながら言いました。「私たちはアフガンの女性であることを誇りに思っている。そのことを世の中に伝えたいのです。」ファヤーズ氏は当大学で学ぶ297名の女性がどのようにリーダーとして生まれ変わり、いかに故郷での根強い衝突を解決し女性にとって公平な世の中を作っているのかという良い例です。

アジア女子大学はバングラディッシュで育ち、後に米国にて数々の国際開発機関に勤務したカマール・アマード(46)が発案した大学です。アマード氏は2000年、国連の人間開発指数、すなわち世界各地における社会的・経済的成長に関する統計で、これまで前進してきたすべての地域に共通する点として教育を受けた女性が文化的・政治的変化をもたらしているということに気づき、当大学のアイデアが生まれました。

「この地域には民族、宗教、あるいは言語による終わりなき衝突の歴史があります。」アマード氏はこう語ります。「コミュニティの意識を改革しなければ変化が訪れることはありません。」

資金調達や教員・経営者の応募に9年間疾走した末、アマード氏は2008年に大学の予備校であるアクセス・アカデミーを開講し2009年に大学の学部課程を開始しました。現在、港町チッタゴンの

大学ではアフガニスタン、バングラディッシュ、ブータン、カンボジア、中国、インド、ミャンマー、ネパール、パキスタン、スリランカ、ベトナム、そしてパレスチナ地区を含む 11 か国からの大学生が通っています。また、アクセス・アカデミーには 119 名の学生が在籍しており、彼らはここで英語、数学や基礎科学の準備コースを学んでいます。

根深い社会問題を解決するという使命のもと、大学側は学生たちが理論的研究で学んだことをアジアや世界の国々が面している現代的問題解決のために適用するよう促しています。大学ではアジア学、生物、環境科学、公衆衛生や政治、哲学、経済学などの専攻科目から選べます。オクスフォード大学、シカゴ大学など、世界の名だたる大学をモデルにしたカリキュラムには話術や文書のコースもあり、生徒が政治討論に参加したり、ファヤーズ氏のような説得力溢れるスピーチを発表できるよう注力しています。

生徒は学んだことをさっそく実践しています。戦火に引き裂かれたスリランカから来たタミル族とシンハラ族の生徒は共に母国を訪れ、二つの民族が和解できるよう働きかけました。彼女たちは墓地に花を植え、礼拝所を訪れ、民族混合チームによるクリケット大会も開催しました。「チッタゴンで築き上げた結束力が大きく花開いた瞬間でした。」アーメド氏は言う「とても力強く、効果的な活動でした。」

#### “自然の力”

アーメド氏は禅僧のような持前の静寂さと穏やかさでこれまでサポーターを集めてきました。その中にはビル・ゲーツ夫妻やノーベル平和賞受賞者ムハマド・ユヌスや国際人権活動家であり英国の前首相トニー・ブレアの妻シェリー・ブレアなど世界の著名人が含まれています。

アジア女子大学協力財団の会長でありハーバード大学への寄付金の管理会社ハーバード・マネジメント・カンパニーの前社長のジャック・マイヤー氏はこう語ります「カマールは自然の力そのものだ。誰かが‘ジャックに会ってきた’といっても特に意味はないが‘カマールと会ってきた’となれば絶対に何か起きる。彼は寛大で聡明でありながら人とのコネクションを作る能力にも長けている。」

実際、ブレア氏は 1 月に大学の学長に任命されました。彼女は当時まだ首相だった夫とアフガニスタンを訪れた際、女性たちが「女の子に対する教育の意義を高めるためにはその教育自体をアジア全域でより強く推進しなければならない」と訴えてきたのです。ブレア氏は言います「そこでひらめいたのです。堂々とエリート主義を掲げ、明日のリーダーになり得る可能性が最も高く最も優秀な女性を集める大学を作るということを。」

しかし、ブレア氏のような献身的な人物がいるにも関わらず大学は学者や管理者の確保に苦しみ、設立当初はトップの人間が次々と入れ変わりました。アーメド氏はこう説明します「我々は発展途上で設立されたばかりの大学です。歴史ある機関に比べて資源もシステムも未熟です。設立の際、米国の女子大学からの支援を期待していましたがプリンマー大学を除けばこれまで支援してくれた女

子大学は皆無です。」プリンマー大学とロックフェラー財団は1月ダッカで開催された第二シンポジウムの資金を提供してくれました。

このイベントに出席したプリンマー大学学長のジェーン・D・マカリフはこの新しい大学を支援する理由は自分の大学との共通点があるからだと言います。「この大学は、学生自身が立役者となり、自分の手で社会変化をもたらすことの重要性を心から学生に伝えようとしています。それはプリンマー大学もまったく同じなのです。」

ようやく軌道に乗り始めた大学はオーストラリアや米国から次々と教員や管理者を迎えています。7月、大学は学部長にメアリー・サンサロン（52）を任命しました。サンサロン氏はセントルイスにあるワシントン大学工学部の元学部長であり、コーネル大学の学問的プログラムの元副学部長でもあります。ある日、同僚から「メアリー、あなたのために作られたような仕事よ」と言いながら募集要項を手渡されたことを笑いながら当時を振り返ります。「新しいプログラムを作るのは大好きだし私はエンジニアとして女性にもっとチャンスを作ろうと、女性の代弁者として長年勤めてきました。だから南アジアの女子大学というのは本当に魅力的でした。」

大学では15名募集したところオーストラリアやカナダ、ヨーロッパ、米国から1,000以上の応募があったとサンサロン氏は言います。当大学ではインド工科大学やタフツ大学など一流大学で長年教鞭をとってきた教授もいますが若い教員を積極的に採用するようにもしています。「彼らはこのような環境に対して心を広く、フレキシブルに対応できるからです。」とサンサロン氏は言います「彼らは生徒たちに計り知れないぐらい多くのことを与えています。」

#### インスピレーションの源である生徒

新しい教員にとって、世界で上位を占める新興成長市場、インドと中国に隣接する国で働くことは自身にとっても非常に貴重な人生・文化体験となっています。「これが私にとって初めての教職ですがこうやって様々な思いを形にできるというのは本当に素晴らしいことだと思います。」化学の准教授アンバー・ワイズ氏はこう語ります。カリフォルニア大学バークレー校の博士号を持つワイズ氏は新興国で働くことの難しさに日々立ち向かっています。例えば、実験室で扱う材料の調達もその一つです。実験で使うココナッツ油を求めて連日チッタゴン中を疾走したことを笑いながら話してくれました。

しかし、どんな時でも困難よりも利益の方が必ず勝り、当大学の教員は学生からインスピレーションを常に受けていると口を揃えて言います。「日々の学習に対する彼女たちの好奇心の深さに感激します。」オーストラリア出身の生物教師ブレンダ・クランツはこう語ります。

また、世界文学のとある授業で准教授ジョアンヌ・ナイストロム・ヤンセンは激しいディスカッションを繰り広げました。このディスカッションにはほぼ全員の生徒が参加しましたがそんな中でも生

徒たちは教室後方で赤のサルワール・カミーズ姿で進行を見守っているブレア氏にまったく臆すことがありませんでした。

授業料は10000ドルですが生徒の95%は奨学金で通っています。アーメド氏は将来的には年間1000万ドルという年間予算を維持するためにも学費を支払える学生が増えることを望んでいます。「これは施設を維持するための重大な柱です。我々は競争力ある機関になりたいのです。児童養護施設だけにはなりたくありません。我々は貧富に関係なく、もっとも優秀な人材を招きたいと思っています。」現在、大学はバングラディッシュ政府から寄付された土地に新たなキャンパスを建設するため資金を集めています。しかし、より切迫した急務として2200万ドルを必要としています。この資金は2013年より開始する大学施設に必要な金額です。

本館建設を開始するには1200万ドルが必要だと大学委員会は言います。今のところ650万ドルは集まったので地形と基礎作りを開始しています。「的確な人物にコンタクトさえすれば550万ドルは電話一本で入手できるはずで今もいくつかの計画を手掛けています。」メイヤー氏のこの発言は少々強がりのようにも聞こえるかもしれませんがたった数時間前にクウェート人男性が50万ドルを寄付したばかりでした。そして、メイヤー氏はこう続けます「彼は今日初めて会った人物だ」と。

大学はこれから2-3年以内にマネージメント、環境科学、および工学の大学院課程を開始し、教員数を倍増し、ニューイングランド学校大学協会の認定を受けたいと考えています。

2013年に第一期生を送り出す予定ですが、ここで受けた教育や習得したスキルは将来のためになるものだと学生の誰もが確信しています。パレスチナ地区出身の大学1年生バーヤン・サライーメは言います「私たちは教員も含めたすべての人たちにとって大きな希望になります。ここはいずれ世界中の注目を浴びるでしょう。」

(Chronicle of Higher Education subscribers only: <http://chronicle.com/article/In-Bangladesh-a-New/127757/>)